



## 移民の生徒とそれ以外の生徒の学力差は縮小できるのか？

- 2003年から2012年の間に、移民の背景を持つ生徒の割合は新旧の移民受入れ国のどちらにおいても増加している。
- 移民の生徒とそれ以外の生徒の学力差は、2003年から2012年の間に平均して減少している。
- 移民の生徒とそれ以外の生徒の数学的リテラシーにおける得点差は、社会経済的背景の違いによっては半分も説明されない。

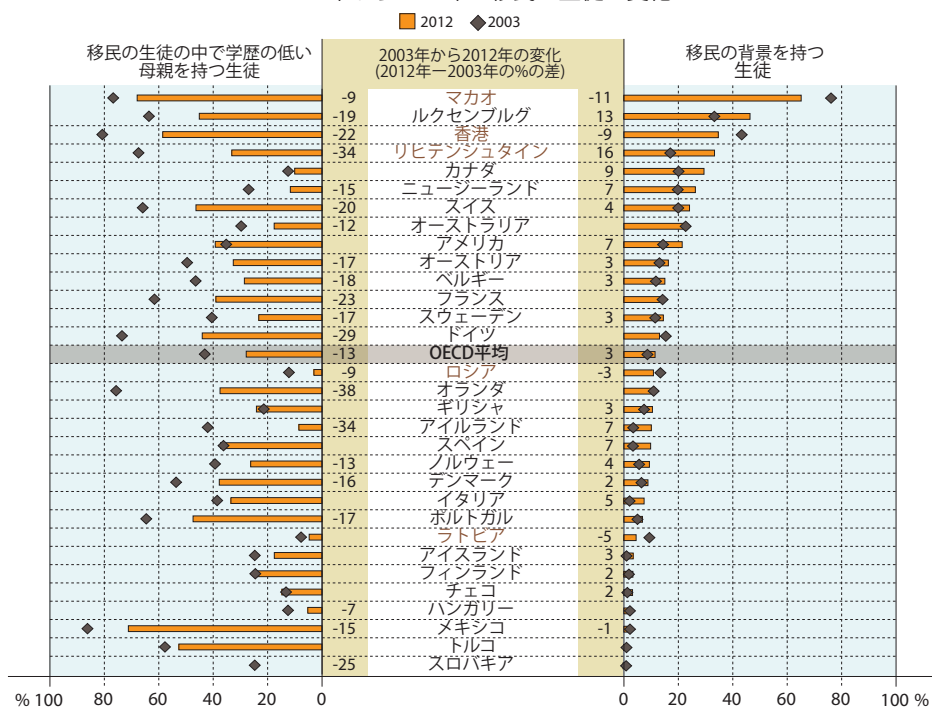
移民の背景を持つ生徒の多くが学校で多大な困難に直面する。彼らは早急にそれまでとは異なる学習上の要求に適応し、新しい言語で学び、彼らの経歴と居住地である移民先の国を包括する社会的アイデンティティの構築をしなければならない。また彼らは、しばしば家族と同級生の間で相反する圧力を受けながらこれらを行わなければならない。移民が社会経済的背景の低い学校がある貧しい地域に隔離された場合、これらの新しい社会に溶け込むための困難は拡大する。よって、PISA調査において移民の生徒とそれ以外の生徒の得点に常に差があることは、当然の結果と言える。しかしながら、移民の生徒はそのような多大な困難を克服し、優れた学力を発揮することができるということも、PISA調査の結果から読み取ることができる。国によって移民の生徒とそれ以外の生徒の得点差に大きなばらつきがあることから、これらの格差を是正するには、国の政策が重要であるということが推測される。

2012年の調査では、OECD加盟国の平均で15歳児の11%が移民の背景を持つ生徒であった。その内訳は、6%が移民第二世代（PISA調査を受けた生徒はその国で生まれ、外国で生まれた両親を持つ世代）、5%が移民第一世代（生徒もその両親も外国で生まれた世代）であった。マカオ、カタール、アラブ首長国連邦では半数以上の生徒が移民の背景を持っているのに対し、19の国や地域では、移民の割合はすべての15歳児の1%未満であった。移民した家族に育てられた生徒の割合は、OECD加盟国全体では2003年から2012年の間に3ポイント増加した。移民の背景を持つ生徒の割合が最も増加したのはカナダとルクセンブルグで、アイルランド、イタリア、ニュージーランド、スペインでは移民第一世代の生徒の割合が最も増加した。

## 技能の高い移民の競争が始まっている…

多くの移民の出身国で教育成果が急速に現れており、移民政策においては技能による選別が拡大している。その結果、2003年以降は移民の生徒の教育歴が著しく改善しており、それに伴い、移民先の地域の学校で良い成績を収める可能性も高まっている。しかし、このような移民の構成の変化がすべてのPISA調査に参加した国や地域で同様に起こっている訳ではない。例えばアイルランドの2003年調査では、移民の生徒の40%以上が後期中等教育を受けていない母親に育てられていたが、2012年の調査ではそれが9%に減少していた。能力が高い移民にとって有利となるよう、自国への受入れ審査にポイントテストを採用している国の中でオーストラリアやニュージーランドは伝統的に学歴の低い家庭の移民が少ないが、そのような生徒の割合を更に減少させた。

2003年から2012年の移民の生徒の変化



注：2003年調査と2012年調査の比較可能なデータを有する国または地域のみを掲載。  
 学歴の低い母親とは、最終学歴が前期中等教育以下を指す。  
 国名または地域名の左側の数字は移民の生徒の中で学歴の低い母親を持つ生徒の、右側の数字は移民の背景を持つ生徒の2003年調査と2012年調査の割合の差をそれぞれ示す。統計的に差が有意である値のみを掲載。  
 OECD平均は、比較可能なデータを有する加盟国の平均値である。  
 2012年調査の「移民の背景を持つ生徒の割合」が多い順に上から国または地域を並べている。  
 出典：OECD, PISA 2012 Database, Table II.3.4b.

## …そして幾つかの国において、特に顕著である。

OECD加盟国全体の移民の背景を持つ生徒と持たない生徒の数学的リテラシーの得点差は、2003年調査では47点であったが、2012年にはおよそ10点差が縮まった。また移民第二世代の生徒は、移民第一世代の生徒を平均16点上回った。しかし移民の背景を持つ生徒と持たない生徒の平均的な得点差は、特定の国々における幾つかの顕著な差異のパターンを反映していない。例えばフィンランドの数学的リテラシーの得点を見ると、2003年から2012年の間に移民の生徒の成績は低下したが、同時期に移民以外の生徒の成績も低下したため、両者の得点差が開くことはなかった。対照的に、イタリアでは増加する社会経済的背景の低い移民の生徒の数学的リテラシーの得点が移民以外の生徒の得点ほど上がらなかったため、両者の差は拡大した。

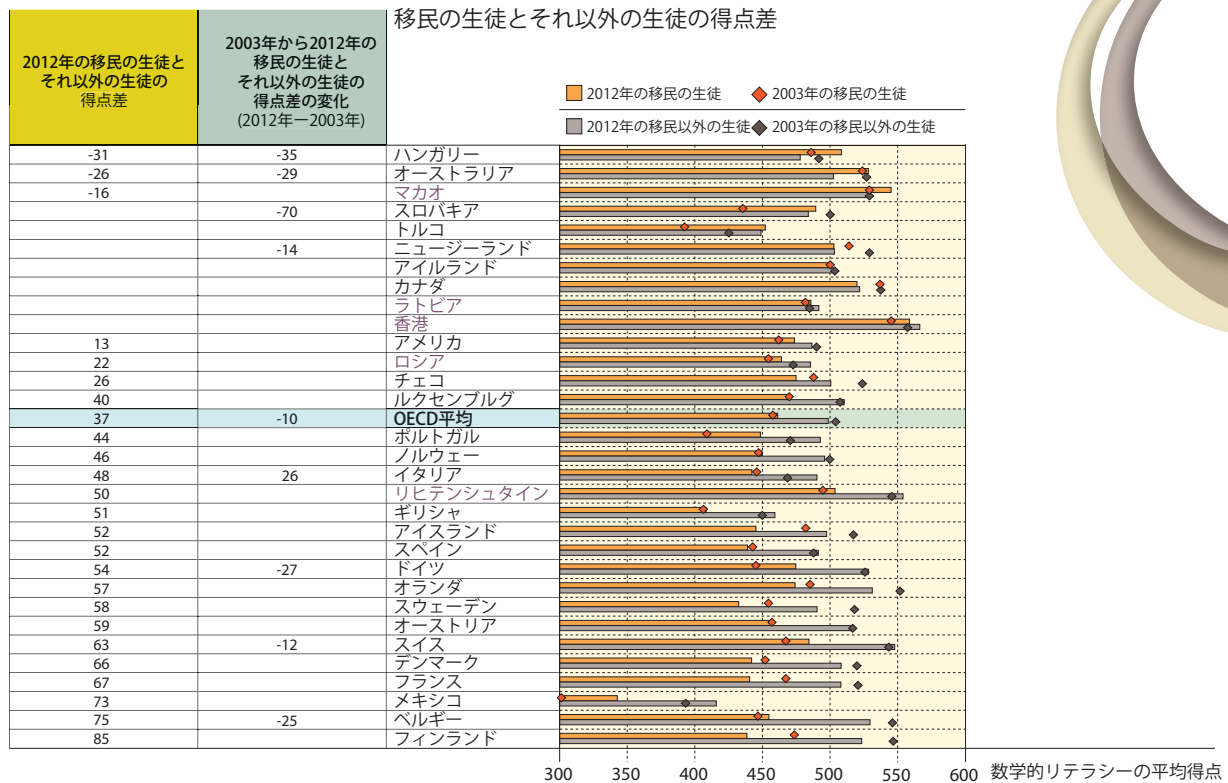


カナダ、アイルランド、ニュージーランドでは、移民の生徒とそれ以外の生徒の双方が2012年の数学的リテラシーで同等に良い成績を収めた。オーストラリア、ハンガリー、マカオでは移民の生徒がそれ以外の生徒の得点を上回った。ドイツでは、数学的リテラシーの習熟度の基本レベルを下回る生徒が11ポイント減少したことで、得点差がOECD平均に近づいた。

移民の出身国と技能の急激な変化は、近年の傾向の背景にある重要な要素である。例えば中国とインドは近年、ニュージーランドとともにオーストラリアへ移民を送り出す主要国となった。そしてインドまたは中国からオーストラリアへの移民第一世代、移民第二世代は、オーストラリアの移民以外の生徒より数学の成績でそれぞれ61点と94点高い成績を収めた。

### しかし国境での選別は効果的な統合政策の代わりにはならない。

技能に基づいた厳しい移民政策を行っている国々で移民の数学的リテラシーの得点が良いという事実は、入国時の戦略的な選別が得点差をなくすための最短の方法であるということを示唆しているのかもしれない。しかし移民法は、受入れ国に同化する上で移民を支援する社会的・教育的な政策の代わりにはならない。移住前に身につけた技能レベルと移住先の国での得点の結び付きが強い一方で、それは永続的なものではなく、社会経済的背景の低い移民の援助により多大な利益を得られるという側面もある。例えばPISA調査によると、オーストラリア、イスラエル、アメリカでは、PISA調査に参加したすべての生徒の上位4分の1に占める社会経済的背景の低い生徒の割合は、移民以外の生徒より移民の生徒の方が大きい。このような貧困と移民の背景という二重苦を克服した意欲の高い生徒は、受入れ国へ並外れた貢献をする可能性がある。



注: 「生徒の社会経済文化的背景」指標のデータを有する生徒のみを対象として集計。  
 「2012年の移民の生徒とそれ以外の生徒の得点差」と「得点差の変化」は統計的な有意差がある場合のみ、値を示してある。  
 OECD平均は、2003年と2012年の比較可能な数学的リテラシーの得点と、移民の生徒のデータを有する国とのみの比較。  
 2012年の移民の生徒とそれ以外の生徒の得点差が小さい順に上から国または地域を並べている。  
 出典: OECD, PISA 2012 Database, Table II.3.4b

StatLink <http://dx.doi.org/10.1787/888932964927>

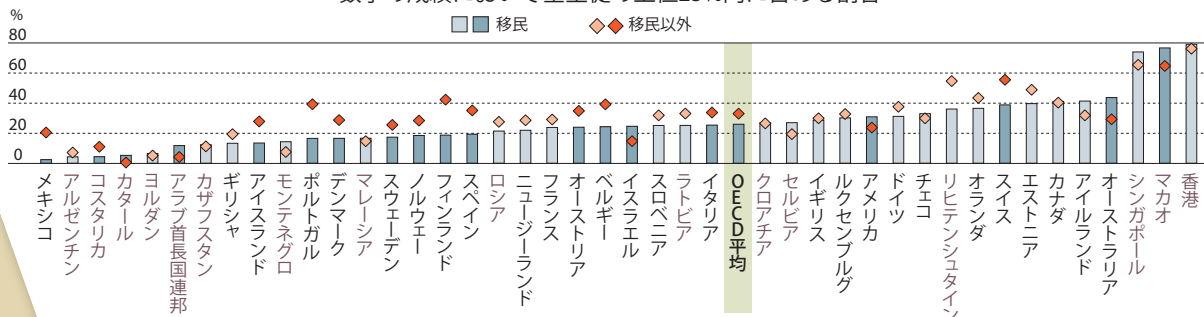


# PISA

## IN FOCUS

移民の背景に関連する数学的リテラシーの得点差は、社会経済的背景の違いの影響を取り除いても半分も縮小せず（2003年と2012年の両方のデータを有するOECD加盟国全体で37点から23点に縮小）、ほとんどの国で統計的な有意差が見られる。このことから、国は移民選択の仕組みを是正する以上の施策が必要なことがわかる。つまり、すべての移民の生徒の潜在能力を開花させるために、教育システムにおける受入れ能力を高めることが必要である。全日制学校への助成金や移民の生徒への言語教育の構築は移民の生徒と家族が教育の恩恵を十分に受け、移民の生徒が受入れ国の経済的・社会的な幸福に貢献できることを保証する助けとなるだろう。

移民の背景を持つかどうか別の、社会経済的背景の低い生徒が数学の成績において全生徒の上位25%内に占める割合



注：グラフは移民の生徒とそれ以外の生徒それぞれの、「生徒の社会経済文化的背景」指標において各国の下位25%に属し、かつ国際的に上位25%の成績を取めた生徒の割合を示す。  
濃い色は、移民の生徒とそれ以外の生徒の間に統計的な有意差があることを示す。  
数学的リテラシーにおいて国際的に上位25%の成績を取めた移民の生徒の割合が小さい順に左から国または地域を並べている。  
出典：OECD, PISA 2012 Database

**結論：移民の背景を持つ生徒は移民先への統合と社会経済的背景の低さという二つの困難があるにもかかわらず、移民以外の生徒と同等の成績を収める可能性を持っている。教育システムには、移民の生徒が学校の提供する学習機会を最大限に利用することを保証するという役割がある。大規模な移住者の受入れや移民の統計データ上の変化を目の当たりにしている人々は、その目的と基準が明確に設定された語学クラスなどの、移民の生徒のために構築されたプログラムを提供するシステムから学ぶことができる。**

本稿に関するお問合せ先

担当：Mario Piacentini (Mario.Piacentini@oecd.org)

出典：OECD (2013), *PISA 2012 Results: Excellence through Equity (Vol. II): Giving Every Student the Chance to Succeed*, PISA, OECD Publishing, Paris.

OECD (2014), *International Migration Outlook 2014*, OECD Publishing, Paris.

OECD (2010), *Closing the Gap for Immigrant Students: Policies, Practice and Performance*, OECD Publishing, Paris.

参考サイト：

[www.pisa.oecd.org](http://www.pisa.oecd.org)

[www.oecd.org/pisa/infocus](http://www.oecd.org/pisa/infocus)

[Adult Skills in Focus](#)

[Education Indicators in Focus](#)

[Teaching in Focus](#)

次回テーマ：

授業時間を増やすことは学習のプラスになるか？

本稿の翻訳は、日本のPISAナショナルセンターが担当しました。

Photo credits: ©khoa vu/Flickr/Getty Images ©Shutterstock/Kzenon ©Simon Jarratt/Corbis

This paper is published under the responsibility of the Secretary-General of the OECD. The opinions expressed and the arguments employed herein do not necessarily reflect the official views of OECD member countries.

This document and any map included herein are without prejudice to the status of or sovereignty over any territory, to the delimitation of international frontiers and boundaries and to the name of any territory, city or area.

The statistical data for Israel are supplied by and under the responsibility of the relevant Israeli authorities. The use of such data by the OECD is without prejudice to the status of the Golan Heights, East Jerusalem and Israeli settlements in the West Bank under the terms of international law.